原	著
---	---

東京医科歯科大学歯学部附属病院における新来患者に関する調査

石 田 恵¹⁾ 五十嵐 公⁴⁾ 押 尾 はるみ²⁾ 飯 田 浩 司²⁾
 清 水 チ エ²⁾ 俣 木 志 朗³⁾ 黒 崎 紀 正²⁾

¹⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 全人の医療開発学系専攻 包括診療歯科学講座 口腔心身医学分野
 (主任：小野 繁教授)

²⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 全人の医療開発学系専攻 包括診療歯科学講座 総合診療歯科学分野
 (主任：黒崎紀正教授)

³⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 全人の医療開発学系専攻 包括診療歯科学講座 歯科医療行動科学分野
 (主任：俣木志朗教授)

⁴⁾東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 環境社会医歯学系専攻 医療政策学講座 医療経済学分野
 (主任：川淵孝一教授)

(2000 年 12 月 8 日受付)

A Survey of Awareness Among New Patients at the Department of Oral Diagnosis and General Dentistry

Satoshi Ishida¹⁾, Isao Igarashi⁴⁾, Harumi Oshio²⁾, Koji Iida²⁾
 Chie Shimizu²⁾, Shiro Mataka³⁾ and Norimasa Kurosaki²⁾

¹⁾ Section of Oral and Maxillofacial Psychosomatic Medicine, Department of Comprehensive Oral Health Care,
 Division of Comprehensive Patient Care, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University
 (Chief: Prof. Shigeru Ono)

²⁾ Section of General Dentistry, Department of Comprehensive Oral Health Care,
 Division of Comprehensive Patient Care, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University
 (Chief: Prof. Norimasa Kurosaki)

³⁾ Section of Behavioral Dentistry, Department of Comprehensive Oral Health Care,
 Division of Comprehensive Patient Care, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University
 (Chief: Prof. Shiro Mataka)

⁴⁾ Section of Health Care Economics, Department of Health Science Policies,
 Division of Public Health, Graduate School, Tokyo Medical and Dental University
 (Chief: Prof. Koichi Kawabuchi)

The purpose of this study is to know the outline of clinical statistics of new patients at the Clinic for Initial Diagnosis/Emergency, Dental Hospital, Tokyo Medical and Dental University. We examined 1,001 new patients who visited our hospital from 19 October to 8 December 1995.

The results were obtained as follows:

1. Our subjects were 1,001 patients, males were 357(35.7%) and females 644(64.3%). The ratio of male to female was 1 : 1.8.
2. Concerning age distribution, the majorities were in their twenties and fifties in order.
3. 71.5% of patients said it took less than one hour for them to come to our hospital.
4. The rate of introduced patients was 5.5% of all the new patients.

I. 緒 言

近年の我が国における社会構造の変化は、歯科医療界にも少なからぬ影響を及ぼしており、歯科疾患構造ならびに患者の歯科治療に対するニーズも大きく変化した。これからの大学附属病院の在り方を検討する一助とするため、新来患者の概要を把握することを目的として臨床統計的観察を行ったので報告する。

II. 対象と方法

1995 年 10 月 19 日 (月) から 12 月 8 日 (月) までに東京医科歯科大学歯学部附属病院総合診断部を受診した新来患者 1,001 人を対象とした。

総合診断部は歯科総合診療部に改組されたが、本学附属病院を受診する新来患者の最初の臨床部門で、問診と簡単な診査を行い主訴に応じて専門診療科 (部) を紹介している。本学附属病院では担当医があらかじめ決定している患者および口腔外科への紹介状持参患者、矯正科または小児歯科の治療希望患者は直接各専門診療科を受診することになっている。

今回、新来患者の居住地と通院時間を調査し、紹介状を有した患者と有しない患者に分け、前者には紹介元の医療機関と来院理由を、後者には本学を知った理由とその来院理由を多肢複数選択式のアンケート調査を行った。

III. 結果と考察

1. 居住地と通院時間

1) 居住地

1,001 名を東京その他の近県に分類したが、東京の 673 名 (67.2%) に次いで埼玉 148 名 (14.8%)、千葉 84 名 (8.4%)、神奈川 64 名 (6.4%) の順で、ほとんどが東京

都とその近県からとなっていた (図 1)。一方、北海道と近畿地方がいずれも 4 名であったが、そのうち家族が東京近辺に居住している者は治療を希望しており、そうでない者は上京の機会に治療の相談を希望して来院していた。これは歯科の大学附属病院としては国内において交通の便に最も恵まれている¹⁾ことが理由と考えられる。

2) 通院時間

通院時間を 30 分単位の 5 段階に区切って調べた。31 分から 60 分が 495 名 (49.5%) と最も多く、30 分以内が 221 名 (22.1%)、次いで 61 分以上から 90 分以内が 173 名 (17.3%) で、1 時間以内が 716 名 (71.5%) と約 7 割であったが、2 時間を越えて来院する患者も 3.8% みられた (図 2)。

通院時間を調査したものは少ないが、広瀬ら²⁾は奥羽大学病院では 30 分以内が 69.5% であり、一方、本学においては約 7 割では 1 時間以内となっていた。本学が交通の便に恵まれているにもかかわらず、30 分も余分に通院時間を要していることは、東京と地方の住宅事情の違いを反映していると思われる。

2. 患者数と性別

男女別では 1,001 名のうち男性 357 名 (35.7%) に対して女性 644 名 (64.3%) と、男性に比較し女性が多く、男女比は 1:1.8 であった。

性差については各施設から女性が多いとの報告^{1,3~18)}がなされている (表 1)。その男女比は 1:1¹⁰⁾から 1:1.8 (本報) と幅広いが、ほとんどの施設で 1:1.3^{3,6,9,11,13,15,16)}である。調査時間、調査期間、対象人数、対象地域などを考慮すると病院を受診する患者は女性が多いが、概して女性は就業率が低いなどの社会的な要因に加え、一般的に男性よりも健康には関心が深いと考えられる。

図 1 居住地 (総数: 1,001 名)

図 2 通院時間 (総数: 1,001 名)

表1 新来患者の男女比

報告者	報告年	場所	患者数	男女比	調査期間
山崎美幸 ¹⁾	1985	本学	不明	1:1.5	不明
奥村智信 ³⁾	1986	日歯大	3,097	1:1.3	1年(1984~1985)
奥村智信ら ⁴⁾	1994	日歯大	4,289	1:1.4	1年(1992~1993)
伊藤雅章ら ⁵⁾	1996	日歯大	4,374	1:1.5	1年(1994~1995)
小川光一ら ⁶⁾	1988	岩手医大	2,158	1:1.3	1年(1985)
大澤孝一ら ⁷⁾	1989	明海大	11,808	1:1.2	3年(1985~1987)
中野憲一ら ⁸⁾	1989	明海大	57,950	1:1.1	11年6ヵ月(1975.6~1985.12)
金子 淳ら ⁹⁾	1989	東歯口外	7,627	1:1.3	4年(1985~1988)
萩原良浩ら ¹⁰⁾	1989	日大	642	1:1	1年(1980)
小川光一ら ¹¹⁾	1989	岩手医大	6,300	1:1.3	3年(1985~1987)
由井 悟ら ¹²⁾	1993	東大	4,751	1:1.1	2年(1990~1991)
小川光一ら ¹³⁾	1994	岩手医大	5,339	1:1.3	1年(1993)
富野照久ら ¹⁴⁾	1997	明海大	29,859	1:1.2	6年7ヵ月(1986.9~1992.3)
戸塚盛雄ら ¹⁵⁾	1997	岩手医大	21,339	1:1.3	4年(1993~1996)
飯久保正弘ら ¹⁶⁾	1997	東北大	27,613	1:1.3	5年(1990~1994)
藤沢盛一郎ら ¹⁷⁾	1997	本学	54,665	1:1.7	4年(1986~1987, 1989~1990)
佐藤泰則ら ¹⁸⁾	1999	防衛医大	1,788	1:1.4	1年(1998)

図3 性別・年齢別 (男性:357名, 女性:644名, 総数:1,001名)

3. 年齢別分布

20歳代が1,001名のうち251名(25.1%)と一番多く、次いで50歳代が205名(20.5%)であった。また、20歳未満の54名と70歳以上の高齢者が58名とほぼ同数であった(図3)。

年齢では各施設でまちまちで、東京歯科大学口腔外科⁹⁾では20歳代が1,758名(23%)と多く、30歳代が1,454名(19.1%), 40歳代が1,280名(16.8%)であったと報告し、岩手医科大学歯学部でも20歳代が21%¹³⁾と最も多かったとし、男女別に分析し、男性では10歳未

満が、女性では20歳代が最も多かったと報告¹⁵⁾している。

その他の施設でも20歳代が最も多い^{4,12,16)}としており、調査年次にかかわらずに20歳代が多いのは、時間的にも通院する多少の余裕があることが考えられるが、女性と同様この年代の者は歯科治療および口腔衛生には関心が深いと考えられた。20歳未満が少ないのは総合診療部では小児歯科、矯正科の受診を希望する患者は原則として対象になっていないことに加え、奥村ら⁴⁾が指摘しているように初診受付が午前中であり、通学時間、授業

図 4-1 紹介元医療機関 (対象：55 名)

図 4-2 紹介理由 (対象：55 名)

時間と重なるためと考えられる。この背景には交通事故などの外傷に伴う歯科疾患や急性炎症などは救急歯科医療を歯科大学が担うことが少なく、対象とする歯科疾患がほとんど慢性疾患が占めているものと考えられた。

4. 紹介元医療機関と紹介理由

紹介状を有した患者は 55 名 (5.5%) で、紹介状を有しない新来患者 946 名 (94.5%) に対して非常に少なかった。

紹介状を有する患者は由井ら¹²⁾は東京大学口腔外科では 4,751 名中 1,578 名 (33.2%)、広瀬ら²⁾は 49.2%、小川ら¹³⁾は 35.3%、富野ら¹⁴⁾は 46.5%と報告している。また、小川ら¹⁹⁾は一般歯科の紹介患者の割合は昭和 50 年の 17.1%から徐々に増加し、昭和 58 年には 40.7%までになり、専門科への紹介率が上がってきていると報告した。

これらに比べ、総合診断部への紹介率が非常に少ないが、これは総合診断部では治療を主として行っており、本学では専門診療科 (部) への紹介状を有する患者は直接専門診療科 (部) に行くことになっていたからである。

なお、1999 年には総合診断部は総合治療部になっている。

紹介元の医療機関は本学医学部、他大学医学部、他大学歯学部、医科診療所、歯科診療所、その他の 6 項目に分類した。歯科診療所、次いで医科診療所、本学医学部の順に多かった (図 4-1)。

東京大学口腔外科では東京大学病院内の他診療科からが 24.2%¹²⁾を占め、他病院歯科 (歯科診療所と思われる) が 4,751 名中 199 名 (4.2%) であり、総計 33.2%の紹介患者のうち、本院内の 24.2%の他の診療科の内訳では内科系が多いと報じている。この理由として口腔粘膜疾患や舌痛症などで内科を受診する者や内科での入院や通院期間が比較的長い患者は内科治療中に歯科受診を

する機会が多いためと考えている²⁰⁾。このように医学部附属病院内にある歯科口腔外科は一般歯科の疾患が初診の約 50%であり、紹介患者の 66.5%が一般歯科の疾患の患者で、歯科口腔外科というより歯科と考えられていると指摘している。岩手医科大学歯学部附属病院では紹介元は自大学医学部が 1/4、学外の歯科が 2/3 で最も多く、そのほとんどが歯科医院であり¹³⁾、東北歯科大学 (奥羽大学歯学部) では開業医 (診療所) の紹介は 9.1%であり、大学が開業医の指導的立場にあることを指摘している¹²⁾。

総合診断部の場合に歯科診療所から多く紹介されていることは特徴としてとらえることができる。

またその紹介理由については、①全身疾患を有している患者、②難症例とされる治療が難しい患者、③患者の事情によるもの、④その他の 4 項目に分類を行った。

歯科診療所と医科診療所の紹介理由はともに歯科的な難症例が多く、それぞれ 83.3%、57.1%を占めていたが、本学医学部からの紹介は患者のほとんどが全身疾患を有していた (図 4-2)。

5. 紹介状を有しない患者の来院動機の情報源

当医院を知るに至った情報源としては友人・知人、家族、各種メディア、歯科医師の指示、医師の指示、その他 (以前から知っていたなど) の 6 項目に分類した。延べ 1,059 名のうち (複数回答可)、情報源としては多い順に友人・知人が 31.6%、家族が 25.8%、その他が 23.0%の順であった (図 5)。

来院動機の情報源ではいわゆる「口コミ」によるものが大部分を占めていたと考えられたが、広瀬ら²⁾も知人の紹介が 33.5%と最も多く、次いで病院職員の紹介が 6.6%であったと同様の見解を述べている。

男女別にみると男性は女性に比べて歯科医師の指示やその他の割合が多く、女性は男性に比べて友人・知人、

図5 情報源（男性：339名，女性：607名，計：946名）
（複数回答可）

図6 来院の動機（男性：339名，女性：607名，計：946名）
（複数回答可）

家族の割合が多かった。受診に対する積極的な姿勢は女性に強くみられた。女性はこの面でも大病院志向あるいは良質で高度な医療を求めていると考えられた。

6. 来院の動機

地理的条件，総合性，専門性，設備の充実，高度な技術，治療費，時間的余裕，治療の相談，前医への不満，その他の10項目に分類した。

男女別にみると男性は女性と比べて地理的条件の割合が多く，女性は男性に比べて専門性や前医への不満，治療の相談などが多かった(図6)。ここでも女性が概して，

より積極的に情報を集め，良質の医療を期待する傾向があると考えられた。

設問が異なるが小澤ら²¹⁾は大学なら安心であるとの初診患者のアンケートを報告している。いずれにしても大学は総合性，専門性，高度な技術，設備の充実を期待されていることが再認識された。

成人の医療受療態度についての調査^{22,23)}によれば，女性がより積極的であると報告している。奥村ら⁴⁾はマスメディアの影響から口臭，咬み合わせ，顎関節の異常，院内感染などの症状を訴える患者が多く来院していた

が、女性が積極的であったと報告した。斎藤ら²⁴⁾は歯科治療を受けるのが怖いという意識を全体の約 65%の者が持ち、男性が 44.3%であるのに対して、女性が 74.9%と女性にその傾向が強いとしていたが、この意識を超えて歯科医療受診率が女性に高いことは特筆するに値する。

大学病院に対するイメージとして広瀬ら²⁾は理想的な治療をすると考える人が 32.7%と最も多く、次いで誰でも治療を受けられるが 22.4%と病院の公共性を挙げている。これに次いで普通の歯科医院と変わらないが、13.1%との見方がある一方、学生の臨床実習を行っているにもかかわらず学生の教材にされるが 9.6%、実験材料にされるが 8.5%などの結果も得られ、大学病院の診療システムがよく知られていない面もあると指摘している。この点では本学は現在も学生の臨床実習を行っているので、大学による差とも考えられる。

IV. 結 語

本調査以降インプラント治療部、顎関節治療部、心身症外来が整備されたが、患者のニーズに応え、大学病院としての良質で高度の医療を提供し、その機能を十分に発揮できるよう、さらに幅広い調査と分析が望まれると思われた。

なお本論文の要旨は、平成 8 年 5 月 18 日の第 9 回日本口腔診断学会総会（盛岡）において発表した。

文 献

- 1) 山崎美幸：歯学部附属病院を訪れる新来患者の実態について。デンタルハイジーン 5(8)：813-816, 1985.
- 2) 広瀬 秀, 寺田 誠, 渡貫 健, 他：東京大学附属病院開設 1 年目における外来患者の実態調査(第 1 報)。東北歯大誌 1(1)：41-49, 1974.
- 3) 奥村智信：日本歯科大学附属病院外来患者の動勢について。歯学 74：232-233, 1986.
- 4) 奥村智信, 落合 均, 住友雅人, 他：日本歯科大学附属病院外来患者の動勢について—その 2—。歯学 81(5)：1256-1262, 1994.
- 5) 伊藤雅章, 高橋建作, 佐藤洋作, 他：日本歯科大学附属病院初診外来患者の動勢について。日歯保存誌 39(2)：536-541, 1996.
- 6) 小川光一, 戸塚盛雄：多変量解析による歯科疾患の部位情報の要約。日口診誌 1(1)：68-76, 1988.
- 7) 大澤孝一, 柴田秀美, 増田 屯, 他：本学予診科における過去 3 年間の新患の全身的既往歴の調査。日口診誌 2(1)：143-152, 1989.
- 8) 中野憲一, 岡田典久, 増田 屯, 他：明海大学歯学部予診科における過去 16 年間の新患の臨床統計的観察。明海歯学誌 18(3)：382-389, 1989.
- 9) 金子 淳, 小沢靖弘, 畑田憲一, 他：当教室における最近 4 年間の患者統計。(抄)日口診誌 2(2)：57, 1989.
- 10) 萩原良浩, 田代明子, 松浦信人, 他：日本大学歯科病院口腔診断科来院患者について<年内変動からの解析>(抄)日口診誌 2(1)：257, 1989.
- 11) 小川光一, 福田容子, 戸塚盛雄：疾患別に集計した現病歴のデーター解析。(1) データーの要約について(抄)日口診誌 1(1)：256, 1989.
- 12) 由井 悟, 古森孝英, 伊東大典, 他：最近 2 年間の当科受診患者における臨床統計的検討。日口診誌 6(1)：12-16, 1993.
- 13) 小川光一, 戸塚盛雄：岩手医科大学歯学部附属病院受診患者の来院経路について。日口診誌 7(2)：449-450, 1994.
- 14) 富野照久, 麻生幸男, 三村 里, 他：明海大学附属病院口腔診断科における新患の臨床統計的観察。日口診誌 10(2)：494-495, 1997.
- 15) 戸塚盛雄, 小川光一：岩手医科大学歯学部附属病院における最近 4 年間の初診患者の臨床統計的観察(抄)。日口診誌 10(2)：495, 1997.
- 16) 飯久保正弘, 笹野高嗣, 栗原直之, 他：口腔粘膜疾患の臨床統計—第 3 報 過去 5 年間の当院新来患者について—。日口診誌 10(1)：46-52, 1997.
- 17) 藤沢盛一郎, 山本 仁, 山本あかね, 他：総合診断部における 4 年間の新来患者の臨床統計的観察。口病誌 64(2)：376-383, 1997.
- 18) 佐藤泰則, 宮下直也, 君島 裕, 他：当科外来新来患者における有病者の臨床統計的観察。一平成 10 年 1 月より同年 12 月までの 1 年間—。日口診誌 12(2)：404-410, 1999.
- 19) 小川光一, 石井由美子, 戸塚盛雄, 他：岩手医科大学歯学部附属病院における最近 9 年間の新来患者の臨床統計的観察。岩医大歯誌 10：149-160, 1985.
- 20) 古森孝英, 高戸 毅, 横山恵以子, 他：歯科口腔外科における院内紹介患者の臨床統計的観察。口病誌 61(2)：237-242, 1994.
- 21) 小澤義彦, 小林 力, 佐藤光洋, 他：日本歯科大学附属病院における初診患者の意識調査。歯学 76(3)：524-525, 1988.
- 22) 八重垣 健, 末高武彦, 榎本美佳子, 他：医療受療態度に関する調査。歯学 75(4)：680-681, 1987.
- 23) 榎本美佳子, 末高武彦, 金沢紀子, 他：産業従事者の医療受療態度に関する調査研究。口腔衛生会誌 36：378-379, 1986.
- 24) 斎藤孝親, 多田充裕博, 須永 亨, 他：初診患者の実態に関する研究。第 2 報：患者の医療に対する意識について。日口診誌 3(1)：61-67, 1990.